



Title	英語の統語法と文体の発達 : フィロロジー的研究からコーパス言語学的研究へ
Author(s)	齊藤, 俊雄
Citation	大阪大学, 1996, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/40372
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について 〈/a〉 をご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏名	齊藤俊雄
博士の専攻分野の名称	博士（言語文化学）
学位記番号	第 12669 号
学位授与年月日	平成 8 年 8 月 9 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 2 項該当
学位論文名	英語の統語法と文体の発達 —フィロロジック的研究からコーパス言語学的研究へ—
論文審査委員	(主査) 教授 今井 光規 (副査) 教授 玉井 俊紀 教授 山本 実

論文内容の要旨

本論文は 3 部よりなる。「英語統語法の発達」、「英語散文の発達」、「英語史研究とコーパス言語学」である。

第 1 部は、筆者の研究の出発点であった伝統的なフィロロジック的方法による史的統語論の研究である。

ここでは、英語の史的統語論のうち、最初に、筆者の関心を引いた品詞レベルの問題—関係代名詞構文、疑問代名詞の格推移、動名詞構文—を扱い、最後に、文の要素間の位置固定化、即ち語順の確立の問題を扱っている。

これらは視野の点から 2 つに分けられる。1 つは長期的視野に立って、取り上げた統語的問題が現代英語の用法を確立した時点を探るものであり（1, 3, 4, 5 の各章）、今 1 つは、英語史の中でも、特に言語変化の激しい時期、つまり、中英語から近代英語への移行期、古英語から中英語への移行期のような、英語の変遷期における統語法の発達・変遷に目を向けたものである（2, 6, 7 の各章）。

第 1 章は、英語の従属構文を担う 1 つである、関係代名詞の近代口語英語における発達を取り上げたものである。これは、C.C. Fries の研究方法に触発され、英国戯曲を資料にした統計的調査である。初期近代英語期から現代に至る関係詞の諸形—*that*, *wh*-関係詞、ゼロ関係詞—の消長を浮き彫りにすることが出来た。第 2 章では、引き続いて関係詞代名詞を取り上げ、古英語から中英語にわたっている貴重な文献である *The Peterborough Chronicle* を資料にして、この過渡期において、関係詞が「文法的性」に依存した体系から「自然的性」の体系に移行する状況を提示した。

第 3 章では、格推移の 1 例として、疑問代名詞 *who* の目的格用法の発達を、約 200 編の戯曲を資料として、後期中英語から 1800 年までの状況を調査した。その結果、*whom* を押しのけて、*who* が優勢になっていく状況を鮮明に示すことができ、また、*who* の格推移の原因について判断材料になる、興味ある用例の収集もあった。

第 4 章、第 5 章では、それぞれ文語英語と口語英語における目的語付き動名詞構文の型を取り上げ、1500 年から 1800 年までの間に、中英語期の 4 つの型が現代英語に見られる 2 つの型に収斂されて行く状況を調査した。文語・口語英語の両種における発達は、質的な違いはほとんどなく、口語のほうが多少時期的に早いことが分かった。

第 6 章、第 7 章では、これまでの品詞レベルの問題から、語順の問題を取り上げた。言うまでもなく、語順の確立は、総合言語の状態から、分析的言語への移行を示す、英語史上最も重要な問題の 1 つである。第 6 章では、第 2 章

の研究で使った *The Peterborough Chronicle* を資料として、資料の3つの部分で、つまり、古英語から中英語への過渡期で、主語・動詞関係の語順がどのように変わっているかを調査している。その結果、近代的な語順である、SV語順志向が時代とともに強くなって行く状況が解明されている。また近代英語的語順の確立の時期に関しては、異なる意見が存在するが、第7章では、15世紀初頭、つまり近代標準英語の台頭期のロンドン文書を資料にして、「行為者・行為・目標」構文の語順の確立時期についての C.C. Fries の説を統計的に傍証した。

第2部は、英語散文の発達を扱ったものである。統語法の発達を過去の文献によって実証的に研究する際に、英語散文史の知識は不可欠のものである。研究者がまず突き当たる壁は、過去の膨大な英語文献資料の中から、何を調査資料として選ぶべきかという問題であるが、英語散文の発達史、文体の発達史に関する知識なしでは、適切な資料を選択することは出来ないということである。

散文の発達史を考える場合、避けて通れないのが、英語散文の連続性の問題である。R.W. Chambers が1932年に、Alfred から More に至るまで、英語散文は宗教散文を通じて連綿と続いている、と主張した。これが永年にわたって英語散文史の定説として受け入れられていた。もし Chambers の説が真理であるならば、英語の文体の発達史研究は、彼の言う連続性の線上に浮かぶ作家の文体を研究していればいいことになる。だが、近年、彼の説に対する批判、修正意見等が盛んに出されている。

第1章と第2章で、Chambers の連続性の主張とその問題点を整理して提示するとともに、この問題に関する批判の重要なものを取り上げて、連続性は、Chambers の主張のように単線ではなく、もっと多様な散文の連続性が考えられることを、結論として述べた。

Chambers の連続性の問題は、古英語から初期近代英語までの散文発達史を取り上げているものであるが、第3章では、近代英語散文の発達の実証的な調査である。王政復古期を挟んだ前後の時代は、近代散文の形成に重要な時期であり、主流がバロック散文から「散文の世紀」の口語的散文に移る時期である。3人の作家を取り上げ、その散文の統語構造を統計的に調査することで、バロック文体と口語的文体の違いを明らかにした。

第3部は、最近興隆してきたコーパス言語学と英語史研究との関係を取り上げている。

最初の2章で、世界で最初の電子化コーパス *The Brown Corpus* の誕生以来のコーパス編纂の歴史と現状を紹介し、その問題点を提示した。

最近のコーパス編纂は、その大規模化と多様化である。大規模化の面では、最初のコーパスが、100万語であったのに対して、1億語、2億語の規模の現代英語コーパスが、相次いで完成している。

それと同時に、多様化の面を見ると、通時的・史的コーパスの編纂も盛んで、既に完成したコーパスおよび現在編纂中のものを紹介する。その第1号として、*The Helsinki Corpus of English Texts* が、Helsinki 大学英語科の努力によって1991年末に完成し、一般の研究者に公開されが、英語史研究にとって画期的な英語史コーパスである。既にコーパス言語学が言語学の1分野として認知を受けているが、英語史研究の分野にも、本格的なコンピュータ利用の時代が到来したわけである。この最近の動きによって、通時的コーパス言語学が、コーパス言語学の1分野として確立しつつあることが感じられる。

コーパスとは、単に電子化したテキストではない。一定のコーパス・デザインを持って、一定のコードで入力された体系化されたテキストの集合体である。*The Brown Corpus* が最初にその範を示したものであるが、*The Helsinki Corpus* も、古英語から1710年までの散文テキストを中心としたマルチジャンル・コーパスであり、各時代の多様なテキスト・タイプより構成されている。これは最近の言語の variation を重視する社会言語学的研究方法を反映するものであるが、まさに、第2部で述べたように、英語史研究者が直面する英語散文の問題について、このコーパスは1つの解答を提示しているわけである。研究者は、様々なテキストタイプの散文の発達状況を比較検討することもできるし、1つのテキストタイプに見られる統語法の歴史を探ることも可能になった。

第3章、第4章では、筆者は、このコーパスが史的統語論研究に果たして有効かどうかを検証する調査を行った。検証には、筆者が従来研究してきたテーマを取り上げて行うのが、より効果的である。従って、第3章では、初期近代英語期の一部のテキスト・ファイルを使って、関係詞を検索するパイロット・スタディーを行い、第4章では、初

期近代英語の部分のテキスト・ファイルをすべて検索して、動名詞構文の調査を行った。この2つの調査の結果、通史的コーパスとしては規模が小さい等の問題点もあるが、大筋として、第1部での筆者の研究や従来の諸研究との整合性があり、The Helsinki Corpusの英語史研究への有効性が確認できた。

今後続々と登場する通時的コーパスによって、英語史の研究では、従来の伝統的なフィロロジック的研究方法と同時に、コーパス言語学的研究も重要な役割を果たすことになるであろう。

論文審査の結果の要旨

この論文は、英語の関係詞と動名詞を中心に、古英語から現代英語にいたる英語統語法の史の変遷を、戯曲の散文をはじめ多くの資料について調査・研究し、併せてその結果を近年急速に発達してきたコーパス言語学的方法で確認するとともに、一つの史的コーパスを用いてコーパス言語学的方法の有効性を検証しようとしたものである。

この論文は3部で構成されている。第1部「英語統語法の発達」は、古英語から現代英語にいたる関係詞の歴史、また関係詞と密接に関連する疑問代名詞の発達、近代英語における動名詞構文の発達、さらに語順の問題などを統計的に調査・分析している。第2部「英語散文の発達」では、英語統語法の史の変遷の研究で避けることの出来ない資料選択の問題との関連で、英語散文の伝統について諸説を批判しながら、17-18世紀の散文の統語法を調査している。第3部「英語史研究とコーパス言語学」では、「ヘルシンキコーパス」を用いて、第1部で対象とした問題のいくつかを再調査し、新しく起こったコーパス言語学的方法によっても、ほぼ同一の結果が得られることを実証するとともに、同コーパスが英語統語法の研究に有効であることを検証している。

この論文の中心的な問題である関係詞の発達については、従来から多くの研究者が、作品のジャンルや英語のレベルにほとんど注意を払わず、しかも正確な統計に依ることなく様々な説を唱えてきたが、本論文が、とくに16世紀以降の発達を論じた部分で、49編の散文戯曲を用い、調査の焦点を口語英語に絞って統計的に信頼できる分析を行っていることは独創的である。本論文の基になった同著者による幾つかの論文が、発表以来今日まで、国の内外から大きな反響を呼んでいることは当然と言えよう。関係詞の発達以外の調査項目についても、客観的で信頼度の大きい統計的方法によって結論を出していることが、この論文の優れた点である。

コンピュータを利用したコーパス言語学の、包括的で迅速かつ正確な資料の分析能力にいち早く注目し、それを活用する道を開いたことも、この論文の大きな功績とみなすことができる。本論文が、遅れているわが国のコーパス英語学の発展に寄与することが期待できる。

本論文の構成について言えば、上記の3部構成の必然性が必ずしも十分に説明されていない。すなわち第2部は、「英語文献資料の中から、何を調査資料として選ぶべきかという問題」の解決のために設けられたもので、統語法の歴史の実証的研究を進めるに当たってとるべき態度・知識を深く考察した重要な部分であるが、この部分を第2部として設定する必然性について、さらに詳しい説明が加えられていることが望ましい。また、第3部においては、ヘルシンキコーパスの有効性をさらに大規模な調査によって、また多面的に検証することが今後の課題となるであろう。なお、この論文には、わずかながら表現上の不統一がある。

しかしながら、総体的に見れば、この論文は前述のように、英語統語法のいくつかの問題を信頼度の高い統計的分析によって解明し、同時にコーパス英語学の可能性を切り開いた点で顕著な貢献を成し、今後の研究の基礎を作ったと言える。

このような諸点から、この論文は、博士（言語文化学）の学位請求論文として十分に価値のあるものである。